

## 【Part 3】 災害文化の力～未来へ向けて

### 災害文化の力 ～未来に向けてその可能性を探る～

山崎 憲治

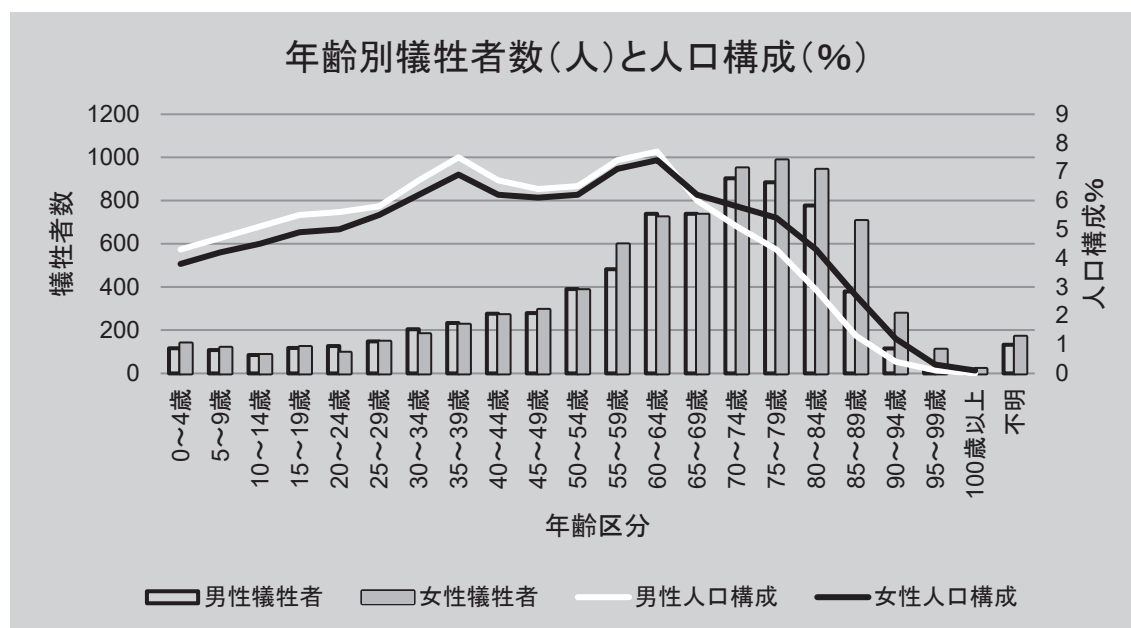
#### 1 はじめに

4つの実践報告を受け、ここでは災害文化とは何か、災害のどこに位置づき、どのような役割と可能性を持つものかを論じる。まず、東日本大震災の犠牲者の年齢構成から、この災害の本質を確認する。次いで災害は衝撃時に留まらず、復旧・復興、予知・警報の段階まで全体として捉えることが必要であることを明示する。それぞれの段階で災害文化が生まれることを明らかにする。また、災害文化が基本的人間活動とかかわって展開することを示す。地域が持つ課題や弱点の顕在化が災害と捉え、その克服と災害文化の関わりを論じるなかから、災害文化の持つ可能性を明らかにする。

#### 2 東日本大震災犠牲者の年齢構成から見たこの災害の特色

この図は東日本大震災の犠牲者を、5経年の年齢別、男女別で集計したものである。もとの資料は毎日新聞2012年3月12日の紙面に公表された犠牲者データ（氏名、年齢、居住地）を、お一人お一人をエクセルに打ち込み男女年齢別に集計、グラフ化した。

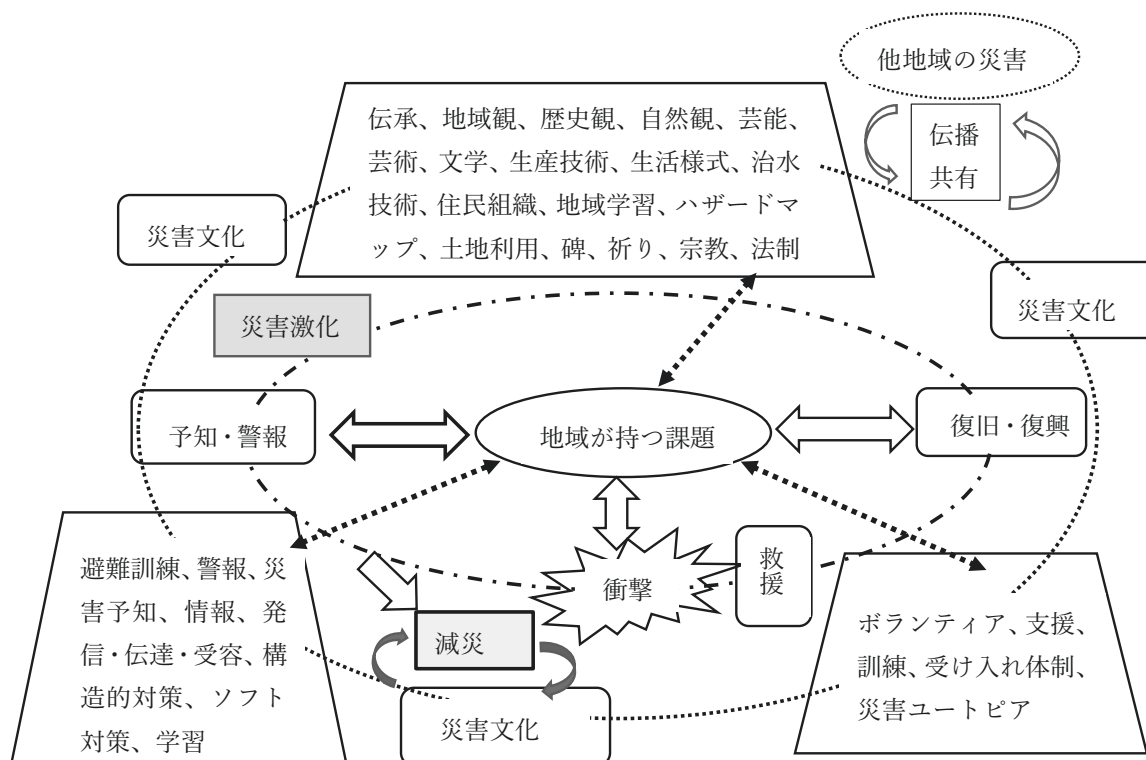
ここでは二つの点に注目した。特筆できる第一は、65歳以上の高齢者の犠牲が全犠牲者の67%を占めている点だ。高齢者を取り残された、避難したいが避難できなかった、という事実が示されている。高齢者、動きが不自由な人も確実に避難できることが、避難体制の基本である。弱者を放置する、あるいはそうせざるを得ない状況は生ま



第1図 東日本大震災犠牲者年齢構成

(毎日新聞2012年3月11日から集計)

## 第2図 災害をトータルにとらえる



れてはならない。人口構成でおおよそ1/4を占める高齢者が、犠牲者の7割近くを占め、高齢者に荷重がかかった事実が読める。犠牲者が生じた地域は、東日本の太平洋岸で広範囲に及んでいる。これは日本という地域が抱える課題に置き換えることも可能ではないか。高齢社会が緊急事態に直面するとうまれる弱点、命にかかわる深刻な課題が端的に示されている。この事実から、災害は地域が抱える課題を一気に顕在化させる（注1）、ことが明確になる。

もう一点は、最も犠牲者数が少ない年齢層に注目した。10 歳から 14 歳。小学校 5 年生から中学 3 年生にあたる年齢だ。小学生が 20 歳代の人より運動能力が優れているとは言えない。小中学校は集団で高台に避難した例が数多く指摘されている。岩手県の沿岸部の小中学校で、学校管理下での生徒・児童の犠牲は報告されていない（山崎憲治 2018）。この数値は、日頃の災害学習の成果を示している。地域全体に災害学習が展開し、避難が徹底すれば、ここまで犠牲を押しとどめることが出来るという可能性を具体的に示している。災害学習による減災の可能性、そして「未来に向け

た具体像 | を読むことが出来る。

### 3 災害をトータルにとらえる中で災害文化を位置づける

災害は間欠性を持つ。災害の歴史を追うことは、将来を見据えることにつながる。災害は当該地域の自然、社会と深くかかわって発生する。この自然、社会の変化は新たな災害や災害激化を派生する。災害を衝撃時にのみに注目し、そこに考察を止めては、災害の本質をとらえることはできない。第2図は災害の全体像を示している。衝撃にとどまらず、復旧・復興、さらに予知・警報の段階まで災害を全体として把握することが肝心だ。災害の各段階を一点破線で示した。それぞれの地域が持つ弱点や課題を実線で示したが、これが巨大な営力によって、一気に顕在化した姿が衝撃だ。衝撃は地域の課題を映す鏡になる。復旧・復興、さらには予知・警報のステージでも、地域の課題は反映されている。これは、地域の将来像あるいは新たな課題が浮かぶ望遠鏡になることも少なくない。災害のステージごとに危機が生まれそれへの対応をとることが期待される。時には

対応が新たな課題を生むこともある。これら諸対応まで含めて災害を問い直すことが、減災や復興をつくるうえで不可欠と思われる。危機への対応を、災害文化という新たな枠組みを設けて考察する。最も外側の破線を災害文化の展開として示している。災害をトータルにとらえるなかで災害文化を位置づけ、減災にむけて災害文化が果たす役割を明らかにするとともに、災害文化の進展が地域の新たな可能性につながることを、本報告の主題にした。

#### 4 災害文化を人間の基本的活動と災害のステージを交差させ考察する

第1表は災害文化を構成する諸事項を、人間活動と災害ステージを相互に関連させて位置づけした図である。災害ステージをまたがっているもの、あるいは人間活動においても複数の活動にかかわるものもみられるものもあるが、スペースに余裕がないため、できるだけ一つの交差する箱に入れて表現した。一覧表に落とすことで、基本的人間活動を見直す多様な契機が災害によって重層的につくられることを知ることになる。

文学、碑、記録、演劇、芝居、オーラルヒストリー、展示館など、メッシュで強調した箱の中におかれたこれら7つの事項は、災害文化を典型的に示すものととらえることが出来る。これらの事項が、災害のどのステージで生まれたか、同時に人間の基本的活動との関連も探してみる。表中の矢印は、災害のステージ、基本的人間活動との相互関係を示している。これら7の事項は、復旧もしくは復興過程に生まれるとともに、表現するという人間活動と相互関連を持つものである。

食べる、住む、学ぶ・知る、表現する、働く、移動、祈る・利他行動、エネルギー確保というカテゴリで基本的人間活動を考えてみた。災害文化を示す事項が、これら基本的人間活動のどのカテゴリに最もかかわりがあるかから位置づけてみた。この作業で、災害文化がそれぞれの人間活動を問い直すことに展開がわかる。さらに災害文化の活動を通して、個人の成長を実現する契機にもなっていく。災害文化の活動に込められたメッ

セージが、受け取る側に響けば、新たな人間関係や行動が生まれる。この関係は、当初の災害文化の活動を問い直すことにもなる。被災体験の検証と語り継ぎの実践は地域に根ざす災害文化の実践例となる（Tomoko Yamazaki 2016）。

文化を「危機に直面する技術」（山口昌男 2009）と考えることが出来る。この捉え方を災害文化に適応すれば、危機を乗り越えるため、地域に着目し、地域を知ることにつながる。さらに、他地域への伝播は、その技術を社会に問うことになる。一定の時間軸を設ければ発展あるいは衰退する災害文化も生まれる。行為者と共に、他者へ、さらに、個人からコミュニティ、地域、国、地球規模にウイングを広げ、それぞれの地域課題に関連し、つながりを持って展開することも問われていく。災害文化が、個人、地域、国、地球規模の課題を問い直す契機になるものとしてとらえることが可能となる。

#### 5 災害文化と個人の成長、地域の課題

各災害文化を一覧表に落とすことで、基本的人間活動を見直す多様な契機が災害文化によって重層的につくられることを知った。人間活動は社会とかかわり、地域、国、地球規模の課題とかかわって展開するものである。災害文化が個別の減災をすすめると共に、直面する地域課題への具体的対処を実現する契機になる。地域の具体的課題への対処は、国・地球が抱える課題へつながることによって災害文化がもつ有効性は拡大していく。

具体的例を挙げてみよう。衝撃直後、避難生活が求められる。田老の親戚の家に避難した例では、そこでは十数人が生活を共にしたが、食事時になると備蓄してあった食材を高齢者がうまく料理し、それを共に食べた避難者が活力を得ている。その食事は田老地域での伝統食であり、忘れていた味を思い出すことにつながっていく。食事とともに展開する人間の関係を大事にすることが生まれていく。地域の食生活を問い直し、さらには地産地消、新たな食の開発まで展開する可能性も視野に入ってくると思われる。あるいは、古井

第1表 災害文化を災害のステージと基本的人間活動からとらえる

	基本的人間活動									地域レベル		国レベル		地球規模	
	食べる・着る	住む・住宅立地	学び・知る	表現活動	働く	移動	交換・贈与	祈り・利他的行動	エネルギー確保	特色・課題	コミュニティ活動ローカル活動	特色・課題	公的支援活動	特色・課題	
災害の ステージ	衝撃時	非常食の備蓄 郷土の伝統食 安全な水 緊急支援食 感染対策 防寒衣類	避難所 安全空間確保 感染対策 プライバシー トイレ 風呂	被災経験を生かす 出来ることを最大限	指示 合言葉 標語 やさしい日本語	命を救う行動 利他行為	緊急避難 高台避難 率先避難 安全避難	備蓄の放出 医療品	ボランティア 利他行為 災害ユー トピア	備蓄とその情報 暖房 ライフライン 確保	地形 降水 プレート 豪雨頻発 水害常襲地	利他行為 ボランティア受け入れ 延命緊急処置 搜索活動 避難所開設、交通確保 災害ユートピア	地形 降水 プレート 環境破壊	実力部隊の支援 ライフライン確保 水・燃料確保 緊急医療体制 交通機関確保 後方支援	災害多発 干ばつ 水害 温暖化 海面変化 水河後退
	復旧	食糧支援配分 感染対策	仮設住宅 住宅立地 住宅かさ上げ 安全の見直し	文学 記録 芝居 オーラルヒストリー 伝承	働く場再建 支援活動 職場復帰	交通確保 医療体制	青空市 支援物資	ボランティア 利他行為 災害ユー トピア	ライフライン 復旧	緊急対応策 安全確認 ボランティア活動 交通路確保 神社立地、安全地確認 感染症対策			避難所設置 実力部隊の支援 被災の実態把握 緊急支援 インフラ復旧活動	海外支援 食糧支援 医療支援	
	復興	食材開発	住宅の安全立地 ハザードマップ 集落移転 町づくり コミュニティ づくり 水屋	災害学習 文学 詩歌 ハザードマップ	碑建立 慰霊・祈念行事 文学、記録 芝居、詩歌 遺構保全 オーラルヒストリー マニュアル作り 展示館	職場安全確保 生きがいと復興 安全の技術 土木技術 起業	避難路 複数の 輸送手段	必要な品が 買える 商業施設	碑 祈念行事	新エネルギー 開発転換  新エネルギー 供給体制 CO2排出削減 から禁止へ	自然への適 豪雨頻発 新規事業 建設事業 人口減少	水害防災組合 実態把握・復興計画 文化創作活動 ソフトな対応・適応 ハザードマップ ローカルノリッジ 依頼・祈念行事 ハードな対策技術	多様性追求 格差 CO2排出 再生エネルギー 一極集中 人口減少 高齢社会	ハードな対策 被災地支援 復興予算 治水技術 復興法整備 ソフトな対応・適応 慰霊・祈念行事 災害メカニズム解明	開発制御 格差は正 温暖化 南北問題 SDG s 海面変化 人口増加 スラム形成
	予知	非常食 食糧水備蓄	安全確認 避難ルート確保 避難シュ ミレーション 家具転倒防止	災害学習 危機意識の共有 避難訓練 伝承 自然観・災害観	避難情報明示 弱者へ個別対応 手話支援 標語 外国語支援	避難体制 移動手段 安全確保	移動手段 移動手順 車両確保 舟の準備	食料水確保 情報確保手段	祈念行事	備蓄とその情報 非常電源 供給ネットワーク	開発規制 避難訓練 移動手段手順 車両確保			シェルター設置 移動手段手順 車両確保	森林破壊 海洋汚染
警報	非常食 感染対策 衛生用具 安全な靴	避難経路確保 簡易トイレ	正確情報を得る 危機管理	正確情報の共有 やさしい日本語	避難体制 早期避難と方法	緊急対応 避難行動	避難袋		非常電源		警報発進伝達 備蓄倉庫、避難所 人命確保 正確情報伝達		正確な情報	人権 平和 エネルギー	



戸の復活を実現した例も宮古に生まれている。廃業した「造り酒屋」で酒の原料水を提供していた古井戸をクラウドファン্ডで復活、その安全でうまい水を介した交流、イベントが創られつつある。ここでも新しい人と人の出会い・関わりを、井戸を介して生もうとしている。復活や再生が新たに展開する点に焦点をあてると、可能性はさらに広がって行く。地域が持っていた「宝物」の再発見が、復興という時間の中で生まれていく、といていいと思われる。

ボランティア活動は、自らも成長し、活動を進めることで復興が加速するばかりか、他の被災地域でも多様なボランティア活動が展開している。行政側にも受け入れ態勢をつくるノウ・ハウが蓄積されていく。東日本大震災では国際ボランティア活動が展開した。大船渡に拠点を構えたオールハnzは、世界各地とのネットワークを形成し、被災者が世界とつながっていること、支援の輪が広がり、孤立していないことを実感した (James M. Hall and Moto Suzuki 2016)。

地域にかかわって文化が創出されるのだが、その地域はかかわる人々に起点をもつ。家族や親類あるいは「ご近所さん」から、コミュニティ、まちまで多様性を持つ。さらにそれが重層化あるいは入れ子状になって表出する。自然も同様、重層性と多様性を持っている。河川を考えれば、二つとして同じ流れはない。河相論 (安芸皎一 1944) が論じられる所以だが、さらにこの川に人間の労働が入ればもっと複雑な様相をもつ。生産の場である水田では、田相という見方が成り立つし、それは冷害、水害、豊作で田ごとに違いがあることから理解される。

災害文化が人間そのものを問うとともに、人間を介して生まれる災害文化が人間によって変容する。人間と文化との間に可逆的なやり取りが継続し発展することが問われていく。

個々の具体的災害文化は人間活動を見直す契機になる。同時に人間活動から災害文化を問うという関係が生まれることを前述した。地域に根ざす文化が、どのように他地域へ影響を及ぼすかが問われることになる。地域の自然は他と交換できな

い、そこに人々の営みがあって、風土が形成される。世界の他の地域でも同様であり、簡便に文化を伝播できるとは限らない。肝心なのは自分たちの足元を掘ることで、多様性と重層性を捉えるなかに、適応や可能性を問うことが生まれる点だ。地球規模の課題を現場に落とし、そこから生まれる災害文化で、地域を問い直す作業は可能だ。この作業を通して、伝播が具体性を持つものと思われる。

一方、地域課題への接近を災害文化から読み解くことは可能であろう。焦点があたる課題を通して世界につながる事が出来る。課題に関する掘り下げを精緻化することで、地球規模の課題に接近することができる。地域に即して課題への本質の接近や具体的な克服方法の中に、危機に直面する技術の、他地域への適応が伝播として生まれてくる。災害文化は「グローカル」な展開が求められる。

## 6 災害文化を中間項として災害の希望学へ

災害文化の持つ力を、人間と地域から捉えなおしてきた。もう一度、原点に戻り災害文化の展望を探ってみよう。

災害は、地域が持つ弱点に集中して現れる。脆弱性の顕在化は、衝撃時ばかりか、復旧・復興時あるいは、予知・警報時でも現れる。災害を衝撃にとどまらずトータルに見ることが肝腎だ。この視座から、災害は、地域がもつ弱い部分に被害や影響が集中するという特徴は、災害を知る上でもっとも肝心なことだと思われる。ならば弱点を知り、その強化に努めれば、災害を克服するばかりか、地域そのものが持つ可能性や豊かさを実現できるのではと考える事が出来る。

そういう観点で災害を捉えなおす。そこには災害文化を中間項として、災害－災害文化－資源というマイナスをプラスに転換する、いわば「災害の希望学」というとらえ方が生まれる。災害について今までとはまったく違ったパラダイムの転換が、災害文化という中間項をもつことで、展望できるのではないかと思える。

## 7 おわりに

時代は、災害文化の可能性と発展が問われるフェーズに入った。災害文化は適応性において、ハードな施設に比較すれば、勝っているといえる。災害を衝撃に止めて捉えては、十分な本質把握につながらない。災害には、衝撃、復旧・復興、予知・警報の段階がある。災害を全体として捉えることが必要だ。同時にそれぞれの段階ごとに災害文化が生まれることを知ることが出来た。文化を危機に直面する技術と解し、危機に人間としてどうかかわるかを問うことが求められる。災害文化を基本的人間行動との関わりで捉えてみると、人間そのものの成長を促す契機が作られ、それが再び災害文化の成長を促す構造を見ることが出来た。災害は地域が抱える矛盾や課題の顕在化である。災害文化は地域が持つ課題を掘り下げる機能を持つ。それは地球規模の課題への接近の路でもある。災害を全体として捉え、災害文化の有効性を知るとは、「災害の希望学」を導く回路になる。

### 注

注1 山下文男 2005 年、『津波の恐怖』東北大学出版会、p.84. では、最も最も犠牲割合が高かったのは 10

歳以下 31.6%（人口割合 21.6%）で、次に 21 歳から 30 歳 13.3%（人口割合 16.1%）、さらに 11 歳から 20 歳 12.7%（人口割合 20.7%）が続くことを報告している。ほぼ同じ場所で発生した大津波においても、それぞれの時代で犠牲の年齢層が異なること、災害弱者がそれぞれの時代の社会的背景を示していることがわかる。

### 文献

安芸皎一 1944 『河相論』常磐書房

山崎憲治 2018「岩手県の被災地における学校の震災対策と災害学習」『社会科教育と災害・防災教育』（明石書店）p.118-129

山口昌男 2009『学問の春』平凡社新書 p.174-193

Tomoko Yamazaki 2016 The Cases of Two Storytellers Who Experienced Tsunami Disasters Twice in Their Lifetimes Japan after 3/11 University of Kentucky Press 160-175

James M. Hall and Moto Suzuki 2016 The Role of Volunteering in Post-Tsunami Town Recovery The Experience of All Hands in Ofunato City, Iwate Japan after 3/11 University of Kentucky Press 364-378

（災害文化研究会世話人）